

ルーマニアの若者の労働に対する価値観について

～ ルーマニア・アメリカン大学在學生及び卒業生へのインタビュー ～

ルーマニアは1989年の革命、2007年のEU加盟を経て、急速な経済成長の最中にある。それに伴い、特に若年層を中心として労働への価値観は大きく変化しつつある。2020年12月11日、ジエトロ・ブカレスト事務所は、ブカレスト市内にあるルーマニア・アメリカン大学の在學生及び卒業生4名に対してオンライン形式のインタビューを実施した。彼らの労働観、仕事探しの方法、転職に対する考え方、日本での就労イメージ、将来の自分の職業の5点について、リアルな声を聞いた。

オンライン・インタビュー参加者

今回のインタビューに協力してくれた4名は全員、ルーマニア・アメリカン大学のアンジェラ・ホンドル・ルーマニア日本研究センターで日本語学習経験がある。参加者のプロフィールは次ページの通り。このうち(2)～(4)の3名は、同センターでボランティアとして働きながら、日本語学習を継続中だ。

なお、同大学は1991年設立の私立大学で、同研究センターでは現在、約300名の学生が日本語を学習している。近年、ルーマニアでは若者を中心に日本語学習の人気が高まり、毎年、同センターの受講枠がすぐに埋まって待機者が出るほどであるという。

(1) ワナ・デュミトル (以下、「ワナ」)



ルーマニア・アメリカン大学・大学院国際事業専攻修士2年。現在、同大学院に在籍する傍ら、2019年11月から沖縄県のハレクラニ・ホテルで勤務中。ルーマニア留学生連盟日本支部コーディネーター。2017年8月、ラグナガーデンホテル（沖縄）のインターンシップに参加。2017年9月～12月、EUのエラスムス・プラス・プログラム奨学金でバンシア大学（仏）に留学。その後、2018年9月～2019年1月に立命館大学（大阪キャンパス）に留学経験がある。



(2) アレクサンドラ・ペトレ (以下、「アレクサンドラ」)

ルーマニア・アメリカン大学・国内外商業・財務・金融関係学部国際事業学科2年。ルーマニアの高校では唯一、日本語専攻学科のあるイオン・クレンジング高校を卒業。高校時代から現在まで、約6年間日本語を学習中。



(3) クリスティアン・ディアコヌ (以下、「クリスティアン」)

ルーマニア・アメリカン大学・大学院観光事業経営専攻修士1年。2017年から日本語を学習中。これまで、米国及び福井大学に交換留学経験あり。



(4) アレクサンドル・デュデスク (以下、「アレクサンドル」)

2020年、ルーマニア・アメリカン大学・大学院経済情報学専攻修了。現在、ルーマニア発のユニコーン企業ユーアイパス（UiPath）で勤務。在学中、福井大学に交換留学経験あり。また、2017年にラグナガーデンホテル（沖縄）、2019年には倉敷機械株式会社（新潟県長岡市）でのインターンシップ経験がある。

【質問1】 皆さんが仕事をする上で、最も重視することは何ですか？

(ワナ) 私はとっては、まず第一に仕事と日常生活のバランスが大事です。次に給与、そして社内の雰囲気やコミュニケーションの良さを重視します。私は現在沖縄県にあるハレクラニ・ホテルで働いていますが、良いチームに恵まれて幸運だったと思います。このホテルは日本のホテル業界でも非常に人気が高いのですが、上司と部下とのコミュニケーションが良く、今は気持ちに余裕があります。

(クリスティアン) 私は、社内の雰囲気と自身のキャリア形成の観点を最も重視します。また、大学院に通っている現在の私の状況では、勤務シフトの柔軟性も重要です。一般的に、ルーマニアの大学院生の多くは平日昼間に就業し、その後夕方に通学します。以前、ルーマニアにある米国企業から、午前6時から午後3時のシフトでオファーを受けたことがありましたが、非常に魅力的でした。結局その会社での就職は実現しませんでした。フレキシブルに早朝から設定された勤務時間が、修士課程での勉学と両立できるという意味では大変貴重でした。

(アレクサンドル) 私は長期的な視点で、従業員の現場の意見が反映されやすい職場を重視します。たとえば、各従業員が会社の運営方針決定の場に参画できたり、上司に反対されるのを恐れず意見が話せるような風通しの良い職場で働きたいです。そのような場面で不平不満が溜まると、職場が嫌いになってしまう可能性があります。

(アレクサンドラ) 私はワナとアレクサンドルに同意します。安定した仕事を得ることと、仕事を楽しむことの両立はとても重要です。それと同時に、自己成長できるような仕事を探してできるだけ多くのことを学びたいと思います。

【質問2】 皆さんは通常どのように仕事探しをしていますか？

(クリスティアン) 私の場合は、フェイスブックやリンクトインのようなソーシャルメディアを多く利用しています。過去にフェイスブックでも、進出日系企業が求人を出しているのを見ました。中でも、従業員、もしくは元従業員の評価・口コミは重要な判断材料になります。それに加え、知人による推薦が非常に重要です。実は、最初の質問でお答えした「ルーマニアにある米国企業からのオファー」というのは、同社で働く知人が人事担当者に私を推薦してくれたことによるものです。ルーマニアでこのような人脈があるということは、仕事を得る際の鍵になることもあります。

(ワナ) 在学中、日本のホテルでインターンシップを経験したことが、現在の沖縄県のリゾートホテルでの勤務に結びついています。ここで日本とルーマニアの仕事文化の違いを学んだことが役立ちました。文化や慣習の違いで戸惑うことはありますが、私は日本の勤務環境が好きです。

(アレクサンドル) 私は元々ITに関心があり、在学時代からIT企業に関心を惹くような履歴書作りに努めました。現在は一ヶ月ほど前から、RPA (ロボット処理自動化) ソフトのユニコーン企業であるユーアイパスで勤務しています。ワナ同様、私もホテルでインターンシップを経験したことがありますが、お客様対応について学ぶことができました。プログラマーを目指す多くの他の志願者と異なる経験を履歴書に書いたことが、良いアピール材料となったと思っています。そのため、実は内定を得るのはそれほど難しくありませんでした。

(アレクサンドラ) 私はまだ就職経験はありませんが、パンデミックになってから、ルーマニアでは残念ながらパートタイム勤務が可能な仕事が減ってしまいました。この状況だと在学中は仕事を経験できません。一方で、まだ卒業まで時間はあるので、当面は将来何がしたいかをじっくり考える期間にしたいと思っています。これまで様々な企業のウェブサイトなどを見たり、家族や知人から情報を入手したりしましたが、今のところはまだ働くチャンスはありません。

【質問3】 転職することについてどう思いますか？特に、既に働いている皆さんは、将来転職する可能性はありますか？

(アレクサンドル) 私が今働くIT業界は絶えず変化しており、大きな雇用創出力があります。従い、私はキャリアの初期には経験を積むために転職を重ねても良いと思っています。現在のルーマニアでは、同等の仕事内容で、遥かに給料が良い企業へ転職できる機会が多くあります。また、自分の仕事に停滞感を覚えたら、同業他社または新業種に転職しても良いという人も多いです。雇用側にとって、経験豊富なほど貴重な人材であるため、転職希望者を優遇して勤続を促すかもしれません。転職を考える理由は一概には言えませんが、よく聞くものではたとえば、不十分な昇給に対する不満、意地の悪い上司や同僚がいる場合の雰囲気悪化などがあると思います。

(クリスティアン) 私はまだ就職していませんが、ケースバイケースだと思います。一度就職しても、未経験分野に挑戦できる場合や、まだ好きな仕事が見つかっていないなどの場合、個人的には転職しても構わないです。もしその仕事が自分の成長に役立たないならば、転職したいと思うのは普通ですよ。一方、自分にもし経験が蓄積され、ある分野に非常に精通している場合、転職は望まないと思いますし、雇用側も容易には手放さないでしょう。

(ワナ) 私がもし現在の職場で成長できなくなったと感じた場合は、たとえ昇給したとしても別の仕事のチャンスを求めるようになると思います。現在の私はまだキャリアの始まりに過ぎず、今差し迫った状況で転職を考えているわけではありません。しかし、個人として専門性を身に付けるためには、今後転職を検討する可能性はあります。もちろん、社内で大きな対立があるなど、それ以上働くことができないと感じた場合は、転職の正当な理由になります。

(アレクサンドラ) 私は一つの職場で成長できるかぎり、転職しなくても良いと思っています。頻繁に転職することでももちろん幅広い経験を積むことはできますが、やはり雇用側にはネガティブなイメージを持たれる場合もあると思います。

(クリスティアン) 共産主義時代には、大学の卒業生はそのまま同じ専門分野の企業に就職するのが普通でした。以前は皆に就職先が与えられました一方、個人の自由はありませんでした。親世代の転職・仕事観と現在の私たちのそれとは全く異なります。現在のルーマニアには自由があり、新たな業種で日々チャンスが生まれています。私たちは開かれた国際市場で、常に仕事を選択する自由があります。私たち若い世代にとって、転職に対して抵抗のある人は以前より減ってきています。

【質問4】 日本で働くこと、もしくはルーマニアの進出日系企業で働くことに、どのようなイメージを持っていますか？また、将来働いてみたいかどうか、理由と共に教えてください。

(アレクサンドラ) 私はいずれ日本で働きたいと思っていますが、やはり残業が多く、休日も少ないというイメージがあります。ただ、自分の経験として、日本企業や進出日系企業のいずれかに就職できれば必ず自分のプラスになると考えています。おそらく日本で働くよりも、海外進出日系企業で働く方が適応しやすい気がします。これはルーマニア内に限らず、たとえば欧州の他国にある進出日系企業で働いてみたい気持ちもあります。

(ワナ) 今、私は既に日本で働いていますが、現在の職場は私の希望に沿うものです。日本人は仕事に対して非常に厳しく、それを大事にしている点は良いことです。しかしながら、日本にも欠点があります。日本では働き方改革が行われていますが、未だにワークライフバランスが悪く、実際に長時間残業の問題が続いています。2、3年で転職する若者も今後増えていると聞きますが、一企業での終身雇用という考えもまた、少しずつ変わってきているのだと思います。

(アレクサンドル) 私は将来、日本とルーマニア双方の進出企業のいずれかで、ルーマニアと日本を結びつける立場から働きたいと思っています。沖縄と新潟における2度のインターンシップを通じて日本の職場環境を体験する機会がありましたが、たしかに日本企業の文化には、欧州のスタイルに合わない側面があると言えます。たとえば、毎日の残業が前向きなものと思われることがあり、その残業量がその人の責任の重さを示しているような風潮が見受けられたことがあります。これは、従業員の生産性とやる気に対してマイナスの影響を与えるものでもあります。

(クリスティアン) 日本で働くイメージは、私は企業によって異なると思います。私たちから見ると、一般的に日本企業はルールが厳しく、社内外のヒエラルキーが非常に尊重され、残業が多いイメージがあります。また、たとえば上司が帰宅しない限り部下は帰れないなどの古い慣習が残っている企業もあり、私たちがこのような伝統的な日本企業で働くことは困難です。日本企業のネガティブな側面の印象を一言で表すとすれば、「出る杭は打たれる」のことがわが思い浮かんでしまいます。しかし、今後、日本にある外資系企業はこの考え方を徐々に変えていくでしょう。たとえば私は東京のIBM社を訪問したことがあります。日本人従業員はオープンスペースで働き、労働時間もフレキシブルで、リラックスした雰囲気働いていることに気づきました。私の場合、もし日本で就職できるとすれば、日本にある外資系企業で働く方が順応しやすいと思います。

【質問5】 10年後、20年後の自分がどのような仕事をしているか、想像して教えてください。

(ワナ) 私は将来、可能であれば、ルーマニアか日本にある公的機関で働きたいと思っています。どちらの国であっても、ルーマニアの将来のために貢献できる場所で働きたいです。在学中に、在ルーマニア米国大使館の商務部でインターンを経験したことがあります。非常に興味深いものでした。現在働いているホテル業界は分野は異なりますが、日本人とのコミュニケーションスキルが磨かれるので将来に役立つと思っています。

(アレクサンドラ) 私も実は外交関係で働きたいと考えています。大学とは別に、他機関主催の有料の外交研修コースに通ったこともあります。しかし、実際に受講してみたところ、外交官になるためには膨大な時間と努力が必要であることを実感し、少し方針転換しようと思っています。私には、外交に少しでも関わるようなイベント関係の職業が合うかもしれません。今後10年くらいかけてさまざまな経験を積み、希望する職業を見つけたいです。

(アレクサンドル) 私には将来、自分のITコンサルティング企業を設立する夢があります。従い、継続的学習と自分の成長は最重要であり、それが可能な職場を探しています。夢の実現のため、勤務中のユーアイパスのほか、大手IT企業（IBM、マイクロソフト、グーグル、フェイスブック、アマゾン、ネットフリックスなど）から重要な要素を学ぶ必要があります。私がそれらの競合になりたいということではなく、自分が成長したいのです。まずは小さな企業で経験を積んだ後に大企業で勤め、最後に自分で起業したいと思います。

(クリスティアン) 私も将来、自分の会社を設立して起業家になりたいです。これは、私が大学院での専攻を選んだ主な理由です。今、私はそのための計画を練っていますが、ルーマニアにはまだ存在しないユニークなアイデアを含むため、この場で詳細はオープンにはできません。日本文化、ビジネス、観光を組み合わせ、まだ国内に競合のない新しいビジネスを興したいです。

以上



2020.12.11
オンラインインタビューの様子